

九十歳のラスト・トラベル

東京都杉並区 松山 泰生

一、
五井の駅に途中下車した時、思わず空を見上げた。珍しい空だと思つた。

どこまでも青く、そして深い。青の上に更に青を塗り重ね、しかも透明を保っている。雲は、ひとつもない。気配さえない。天頂からスカイ・ラインまで、青一色の空だ。

その空が、町全体に覆いかぶさるように広がっているのだ。この空には既視感があつた。

はて？ どこで見たのか。

そうだ！ パリだ。パリの画廊で見た。

一九六一年の冬。私はタンザニアのダルエス・サラームに居た。外務省傘下の国際協力機構は、国連が進める海外援助事業に協力する一環として、日本隊を各地に派遣している。私達は、その活動内容を取材するためにアフリカに入っていた。

しかし、現地の政情が不安定で足止め状態が続いていた。同じホテルに待機していたフランス隊は一旦帰国することになった。私はそれに便乗した。

初めてのパリは肌を刺すような寒さだったが、私は熱心に画廊を見て回つた。

そこで邂逅したのが〈イヴ・クライン〉が描いた《空》だった。その空の、何と明るく鮮烈だったことか。

イヴ・クライン（一九二八〜一九六二）。この夭折の天才は、当時台頭してきたモノクロニズムの旗手である。アメリカ・アート・シーンを中心に注目を集めつつあつた。

彼が創生した《青》は、クライン・ブルーと謂われ、今までに表現されたどの青よりも清澄且つ独創的だった。

そのクライン・ブルーが、市原の町を覆っているのだ。彼の創案した青が、画布の上だけのものでなく、現実に存在していることに、私は感動を覚えた。

私の年齢では、二度と見る機会は無いだらうと思うと同時に、五井の駅に途中下車することになった経緯に感謝した。

二、

冬の盛りだった。好天続きに刺激されたのか、突然遠出をしたくなつた。思えば、ここ数年家に閉じ籠り勝ちだった。一向に収束しないコロナは気になるが、思い立ったら即実行しなければ、九十歳という年齢に〈また今度〉という時間は存在しないのだ。

しかし、この年齢で、ましてや一人旅となると家族の了解が不可欠である。実はこれが難儀だった。

「一人旅ですって。何、カッコつけてるの。駄目に決まってるでしょ」

「途中で変になったら、どうする気イ。何、考えてるんだか」

「そんなエネルギーがあるなら、書斎を片付けなさいよ。今のま

までは迷惑よ」

と、言葉がきついのは、いつもの事だから聞き流せばよいが、家族揃っての断固反対には参った。日頃から小遣いはずんで手なずけていたつもりの孫まで反対する。

そんな家族にも隙はあるもので、そこを突いて軟化させ、同時に「折角のトラベルがトラブルにならぬよう気をつけるよ」と下手な冗句で煙に巻き、どうにか一日だけの一人旅を認めさせた。

しかし、いつ何時心変わりして、「やつぱり駄目」と言い出し兼ねないから、手軽な所で南房総を選んだ。

正直、行く先は何処でもよかったのだ。単独で出掛けることが大切だった。ここ十数年、一人で遠出する機会などなかった。必ず同行者がいた。私の健康を案じての事だが、私から言わせれば、構い過ぎだ。野山を駆け回る訳ではなし、海に潜る訳でもない。ただ、鉄道に乗り風景を眺めることが出来たら、それで満足なのだ。

何度でも言うが、一人で出掛ける事に意味があるのだ。

それにしても、五井の駅で途中下車することになるとは想像もしなかった。

三、

千葉方面に走る電車は快適だった。シートの温りと轍の震動と音が多重効果となって、心地良い眠気を誘う。

その小母さんが、何処から乗って来たのかは定かではない。気がついたら私の隣りに腰を下ろしていた。

笑顔が近所の八百屋の女将さんに似て愛嬌があった。

彼女は周囲に聴こえるように言った。

「暑いねえ。冬とは思えないねえ」

周囲に同感を求めたのか、それとも季節にはそぐわない半袖姿を弁解したのか。

僅かに太蒜たんにくが匂った。

「匂う？ やつぱり。済まないね」

一応は謝罪の言葉を口にしたが、謝罪した訳ではないらしい。「娘の所で、キムチを漬けて来たのでね。だけど、この暖かさでは美味しくなるかどうか。でも、この時期に漬けると決めているのでね。習慣を変えるのは、良くないから」

彼女は、そう言ってドロップの缶を差し出し、周囲にもすすめるのだった。

「このドロップの会社、廃業するのだった。知ってた？」

いや、知らなかった。そうか、廃業するのか。

「コロナの影響かね。それとも、跡取りがいなかったのか。このドロップ、好きなのに」

私もだ、と言いかけたが、口にはしなかった。懐かしいドロップだ。薄荷味はっかが混ざっていて、それに当たると嬉しかった。遠い子供の頃の思い出だ。

「ウクライナ、大変だね。気の毒だ」

話題が突然変わった。「日本もウクライナ以上に大変な時があった。私はまだ幼なかつたから、母親の背中で見ただけけど、東京が燃えるのがこちらの浜からはつきり見えた。子供心にも怖こわかつた。

たよ。夜空が真赤に染まって。泣き叫ぶ声が聴こえてくるようだった。何万という人が死んだ。地獄だよ。爆弾を落すB29だけが、何故か綺麗でキラキラ輝いていた。焼け出された人が、いっぱい逃げて来た。それも着のみ着のままだ。戦争はいけないよ。ウクライナも何とか話し合えないものかねえ。あの大統領、何と言ったっけ」

「ブーチン」

誰かが答えた。

「そうでなくて、善玉の方」

「ゼレンスキー」

また、誰かが答えた。

「そう。その人。いつも薄着のようだけど、自分だけ温かい部屋にいるんじゃないだろうね。そうだったら許せないよ」

漸く工場群の向こうに海が見えて来た。南房総の入口が近づいて来たのだ。

「私の家は、元々漁師でね。今でも免許だけは持つてる。海は捨てられないもの」

また話題が変わった。「内房は魚介が豊かでね。晩のおかずなんか、一寸浜まで走れば手に入った」

その点は同感だった。「家総出で汐干狩を楽しんだものだった。しかし、そうした人達の殆んどが彼岸の人だ。私だけが此岸しがえでウロウロしている。

「そんな豊かな浜を埋め立てることになって漁師の半分は陸に上がったのよ」

日本が工業立国に舵を切り、日本人の生活が変わった時代だ。「漁師もいろいろだね。賠償金を上手に運用して、幕張の高級マンションで暮している人もいれば、寿司屋をはじめ、慣れない包丁に苦勞している人もいる。相変わらず塩水とつき合っている人もいる。いずれにしても生きるのは大変よ」

彼女の表情に、一瞬影を見たと思った。しかし、それも束の間のことだ。「旦那さんは、どこまで行くの？ 館山？」

彼女は、まだ話し足りないようだ。

「次の駅で下りる」

私は突嗟に嘘をついた。彼女の話につき合うのは、いささか荷が重くなっていた。ラスト・トラベルぐらい一人静かな旅であって欲しかった。

「そうかね。五井で降りるの」

彼女の顔に複雑な表情が浮かんだ。私は私で、嘘をついた事に後ろめたさを覚えていた。

「五井の駅って、市原市の駅でしょ」

彼女は、元の表情に戻っていた。「だから、駅の名前を〈市原〉に換えたいと云う人がいる。その一方で、〈五井〉という名は昔からの由緒ある名前だから、大事にしたいという人もいる。それで時々揉めるらしい。今の市長さんや議員さんは、どちら派なんだろう」

彼女は、そう言って笑い、私は下車するために腰を浮かした。

「また、逢えるといいね」

彼女は、そう言い、私は「そうだね」と応じた。

「元気でね」

と、彼女は小さく手を振り、私は「ドロップ有難う」と言っ
て、五井の駅に降りた。

四、

（東京には空がない）と言った詩人がいる。この市原の町に広
がる空を見たら、誰でもそう思うに違いない。

この空こそ、本当の空だと私も思った。さすがはイヴ・クライ
ン。この限りある画布の上に凝縮して見せた。

私は、空の青さに魅せられたように改札を出た。岬まで行こう
という意欲は、もう失せている。私の一人旅の終点は、この駅で
いいと思った。そうと決めたら、私の行動はひとつしかない。

「図書館まで歩くのですか？ バスの方がいいですよ。目の前に
停まりますから」

小湊鉄道の若い駅員は、バスにしろとしきりに勧める。私の年
齢を慮つてのことだろう。しかし、十五分くらいなら歩くことに
しているから、丁寧に礼を言い、なお心配気な駅員の視線を背中
に感じながら、図書館を目指した。

「初めての町では、図書館に頼れ」と教えてくれたのは、某新聞
社の学芸記者だ。以来、忠実にその言葉を守って来た。図書館が
情報の宝庫であることは、体に染み込んでいる。文部科学省の統
計によると、図書館数は全国で約三千四百。現在も微増している
という。

それにしても、市原図書館の規模には驚いた。市原市は、はっ

きり言っつて中規模都市である。しかし、図書館の規模は大都市を
凌ぐ。

帰り際にライブラリアンから受けた説明に拠ると、図書館だけ
ではなく公民館等に力を注いでいるという。最近完成した（市原
歴史博物館）も是非見て行ってくれと彼女は言う。それも押しつ
けがましく無いのが良い。それに幼児連れの若い母親が多いのも
嬉しい。外の図書館の午前中は、老人、殊に男性高令者の天下に
なっている。

でも、この図書館は違うようだ。ヤング・ママの姿が多く見ら
れるのは喜ばしいことだ。

関係者の努力も大きいのだろう。

五、

市原市という都市は、図書館の資料を開くと、六町一村が合体
して市となったとある。

市の北西部の東京湾側には、典型的な海岸平野と埋立地が広
がっている。

山側には、房総丘陵が南北に広がる。いわゆる里山を形成して
いる。

中央部には、養老川が南から北へ流れ、東京湾に注いでいる。
気候は年間を通じて温暖だが、水が乏しかったと考える。

この房総半島に似た地形としては、鹿兒島湾を抱える大隅半島。
三河湾（衣浦湾）を抱える知多半島があるが、いずれも水不足に
悩んでいた。大隅半島は水を余り必要としない甘薯の栽培に特化

し、知多半島は溜池耕作から脱皮し、愛知用水を建設することによって有数な多品種農業を実現した。

房総半島が、落花生で有名になったのは水のせいだろうと、私は思った。

もしかしたら、市原の《五井》という名称は、大切な水という意味で《御井》だったのかも知れない。あるいは、良い水が湧く井戸が五つあったのかも知れない。

ともあれ、この辺りの開発の歴史は古かったと推察する。縄文・弥生の遺跡がそれを示している。

大化の改新の頃には、上総国府が設けられた。

こうした点を考えると、この地は政治・文化の中心だったことが容易に想像できる。今、この地に住む人は、それを誇りにしても良い。

国府は、現在の市役所辺りにあったらしい。正確な場所は、今後の研究を待つことになるだろう。

上総の国司は、一八三代まで続いたようだ。その中には、万葉集の選者の一人である大伴家持も名を連ねている。

また、我国の紀行文の傑作と謂われる《更級日記》を著わした菅原孝標の娘も、父親と同行し、市原の地を踏んでいる。

研究すれば、今後とも面白い事実が判明するのではないか。

鎌倉時代には地頭が置かれ、江戸時代になると旗本の所有地になっただけらしい。

地政学から見ても、上総地方の首根っこに当る重要な位置にあるのに、研究資料は余りないようだ。研究者の出現が待たれる。

市の基幹産業は工業。京葉臨海工業地帯の中核的存在だ。海苔の養殖業は失なったが、大きな富を得たことも事実だ。この工場群が市原市の文化に大きく寄与しているのだろう。

六、

気がついたら、夕方になっていた。

ヤング・ママの姿がめつきり減り、高校生らしい姿が増えた。

私は少々慌てた。折角のラスト・トラベルが図書館だけでは、格好がつかない。私は少し遠回りして五井駅に戻ろうと思った。

空は僅かに紫がかっている。山側の空に雲が生まれている。天頂の辺りに〈クライン・ブルー〉が見えるが、もうあの《空》ではない。青春は、やはり遠いものなのか。

ケイタイが鳴った。

「いま、どこ？ 大丈夫？」

心配しているのだ。

「市原ですって？ 館山ではないの」

説明したら長くなる。帰ったら話してやろう。

「市原にいるのだったら〈里山いちご〉を買って来て。形はイマイチだけど昔の味がして美味しいのよ」

私は「分かった」と言って、ケイタイを切った。私は急に尿意をおぼえた。そして気が付いた。

この町には、公衆トイレがないと。

いつの間に、人が多くなっている。仕事が終わって、家に帰るのだろう。

私も、帰ろう。

終わり